

外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究（6）

北 條 礼 子*
(平成7年10月31日受理)

要 旨

1994年4月に、本学1年生199名を対象に、英語学習のどのような活動についてどの程度不安を感じているのか、英語で話すときに感じる不安の原因は何か、学生は自分の英語力をどのように評価しているのかなどについてアンケート調査を実施した。その結果、学生は授業中皆の前で英語を話すことに強い不安を感じること、その主な理由は、間違ったり変なことを言って恥をかきたくないと思っているからであること、自分の英語力に対する自己評価は全般的に低いことが明らかになった。さらに本研究結果を先回の研究結果と比較したが、被験者が異なっても以上の3点に関して同様の傾向が見られることが確認された。

KEY WORDS

不安 anxiety

自己評価 self-evaluation

語学教育 language education

スピーキング speaking

英語科教育 English education

1. 研究の背景

現在、英語教育の分野において、英語を用いて実際にコミュニケーションができる力を養成することが重視されている。このような最近の状況を考慮に入れると、外国語（英語）学習のうちで、学習者が最も恐れを感じる側面がスピーキングであると考えられることから、学生の不安が高まる可能性が強いことが指摘され(Horwitz 他, 1986)、さらに実際学生はクラスメートの面前で学習中の言語を話すことに最も強い不安を感じていることが報告されている(Young, 1990)。

筆者は日本人 EFL 大学生を対象に、外国語（英語）授業の典型的な学習活動に対して学生がどの程度不安を感じるのかについて継続研究を行ってきた。これまでの研究結果を見ると、学生はクラスメートの前で英語を話したり書いたりするという、いわゆる生産的な学生活動に対し最も強く不安を覚えることが特徴的であった。

*言語系教育講座

先回の第5回の研究では、被験者数がそれまでの研究において十分であるとはいえなかったこともあったので、より多くの被験者を対象とした。また、アンケートの調査項目についても、一部改訂を加えた。さらに、学習者の自分自身に対する評価が語学学習の態度や不安に影響を及ぼすことが報告されている (Horwitz et al, 1986; Phillips, 1992; Young, 1990)。そこで、日本人学習者の自分自身に対する評価として、日本人学習者の自己英語力評価項目を新たに作成し、その結果を検討したが、全体に自己評価が低いことが明らかになった。

語学学習において、不安は重要な情意要因として注目されてきた (Gardner, 1985; MacIntyre, 1991) が、不安が語学学習に及ぼす影響については一貫性のある結果が得られていない (Young, 1990) のが現状である。そこで、今回とほぼ同数の被験者を対象に再度、不安を覚える学習活動とその理由、さらに英語の自己評価力に関するデータを得て、結果に一貫性がみられるかどうか検討することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、

- ①学生は英語学習のどのような活動についてどの程度不安を感じているのか、
- ②英語の授業中、学生が皆の前で英語で話すときに感じる不安の原因は何か、
- ③学生は自分の英語力をどのように評価しているのか、
- ④以上の結果は先行研究結果とどの程度一致するのか

の4点を明らかにすることである。

3. 研究の方法

3.1 被験者：本学1年次生199名

3.2 測定具：Ely (1986), Young (1990) が用いた調査項目を参考にし、佐々木 (1992), 北條 (1993) の結果を吟味した上で、筆者が日本人学習者が被験者であることを念頭において作成したアンケート。アンケートの構成は以下のとおりである。

- 1部：被験者の英語学習に対する意識について質問する項目
- 2部：英語学習について学生が感ずる不安について質問する28項目
- 3部：学生が英語学習に不安を感ずる理由について質問する7項目
- 4部：学生が英語学習に対して抱いている信念に関する27項目
- 5部：学生が自分の英語力をどう評価しているかに関する7項目
- 6部：学生に不安を感じさせない教師の性格・態度に関する10項目

今回の研究では特に2, 3, 5部の結果を検討する。

3.3 調査実施時期：1994年4月

3.4 手続き：約20分の実施時間で、集団調査を行った。回答形式は2部と6部は「1.まったく不安を感じない, 2.あまり不安を感じない, 3.どちらでもない, 4.やや不安を感じる, 5.非常に不安を感じる」, 3～5部は「1.まったくそう思わない, 2.あまり

そう思わない, 3. どちらでもない, 4. ややそう思う, 5. 全くその通りだと思う」の5段階であり, 1～5点までの得点化を行って項目ごとに集計した。なお, 1部と4部の2項目は5段階ではなく, 5肢選択形式である。

3.5 分析方法：分散分析, スピアマンの順位相関係数

4. 研究の結果

4.1 英語学習に対して学生の感ずる不安に関する28項目について

4.1.1. 平均値・標準偏差

表1 英語学習に対して学生の感ずる不安（N=199）

項目の順位	平均値	SD
1. 突然英語で発言するよう指名される	4.51	0.76
2. 授業中, 皆の前で英語で話す	4.10	0.97
3. 授業中, 英語で意見を発表したり寸劇を演じる	4.06	0.87
4. 授業中, 皆の前で, 与えられた状況での役割を自発的に演じる	3.91	0.92
5. 準備してきた英会話を, 授業中に全員の前で発表する	3.86	1.08
6. 授業中, 英作文を書く	3.80	1.01
7. 英語によるディスカッションに自主的に(強制的, 義務的にでなく)参加する	3.77	0.90
8. 英語による質問を聞いて, その答えを英語で書く	3.75	0.93
9. 答えを黒板に書く	3.70	0.97
10. role play (役割練習) を皆の前でする	3.68	0.92
11. 教師の言ったことを, 一人だけで(全員でなく)繰り返す	3.59	1.03
12. 質問に対して, 指名されるのではなく(手をあげるなどして)自発的に答える	3.58	0.98
13. 家で英作文を書いてくる	3.34	1.17
13. 2人1組で作った英会話を皆の前で発表する	3.34	1.00
15. 外国人教師と一緒に活動する	3.27	1.09
16. 2人1組になって, お互いに英語で質問し合う	3.00	1.05
17. ^a 新聞や写真を参考にしながら英語の勉強をする	2.97	1.04
17. ^b 英語の教師の研究室で個人的に教師と話す	2.97	1.16
19. 教師が学生全員を公平に指名する	2.95	1.05
20. 教科書の練習問題をする	2.93	1.02
21. 2人1組になって, 短い英会話を考えて作る	2.91	0.98
22. 英語で発表する(寸劇など)前に, 口頭練習の機会を十分与えられる	2.62	0.92
23. 3～4人のグループで練習する	2.49	0.97
24. 授業中, グループに別れてゲームをし, 勝敗を競う	2.43	1.06
25. 教師の後について, 繰り返す	2.35	1.00
26. ビデオを見たりテープを聞いて学習する	2.18	1.03
27. 授業中, 英文を黙読する	2.04	1.00
28. 授業中, 英文を(全員で)音読する	1.78	0.84

しやすように、全項目を得点の高い順（学生が不安を感じる原因として強い順）に並べているが、表3の項目番号と内容は表1に対応している。

表2, 3より、学生は授業中、「突然英語は発言するよう指名される」ことに最も強く不安を感じる一方、「英文を音読する（全員で）」学習活動に対して最も不安を感じないで済むことが明らかになった。この他に学生が不安を覚えるのは、「皆の前で英語を話す」、「英語で意見を発表したり寸劇を演じる」、「準備してきた英会話を、授業中全員の前で発表する」という学習活動であり、不安を覚えないのは「3～4人のグループで練習する」、「グループに別れてゲームをし勝敗を競う」、「教師の後について繰り返す」、「ビデオを見たりテープを聞いて学習する」、「英文を黙読する」という学習活動であった。

4.2 英語の授業中皆の前で英語を話す際に不安を感じる理由に関する7項目

4.2.1. 平均値・標準偏差

英語の授業中皆の前で英語を話す際に不安を感じる理由に関する7項目の得点をそれぞれ集計し、平均値と標準偏差を求め、平均値の高い順に項目を整理し直したものが表4である。

表4 英語の授業中、皆の前で英語を話すときに不安を感じる理由（N=199）

項目の順位	平均値	SD
1. まちがったり、変なことをいって恥をかきたくない	3.71	0.96
2. とにかく皆の前で英語を話すのは理屈抜きでいやだ	3.41	1.18
3. 先生に英語ができないと思われたくない	2.71	1.06
4. クラスメートに英語ができないと思われたくない	2.70	1.10
5. クラスメートに英語ができないと思われるとプライドが傷つく	2.27	0.96
6. 先生には英語ができないと思われるとプライドが傷つく	2.21	0.96
7. 英語は得意なので、不安は感じない	1.66	0.88

4.2.2. 分散分析の結果（7項目）

英語の授業中皆の前で英語を話す際に不安を感じる理由に関する7項目の得点について、分散分析を行ったが、表5のとおりである。その結果、まず $F(6, 1188) = 137.49$ であり、1%レベルで有意であった。LSD法による多重比較の結果は表6のとおりである（MSe=0.72, 5%水準）。なお、表6は理解しやすいように、全項目を得点の高い順（学生が不安を感じる原因として強い順）に並べているが、表6の項目番号と内容は表4に対応している。

表5 分散分析表（英語の授業中皆の前で英語を話す場合、不安を感じる理由）

S.V.	SS	df	MS	F
Sub	580.35	198	2.93	
A	602.19	6	100.36	137.49**
SxA	867.24	1188	0.73	
Total	2049.78	1392		**p<.01

表5, 6より、ここで取り上げた7項目のうち2カ所で5%レベルで有意差がみられなかった。この結果について、有意差がみられた箇所を>を用いて図示すると、図1のようになる。つまり、「まちがったり、変なことをいって恥をかきたくない」>「とにかく皆の前で英語を

表11 分散分析表（学習者の自己英語力評価に関する7項目:N=199）

S.V.	SS	df	MS	F
Sub	387.87	198	1.96	
A	1040.59	6	173.43	291.14**
SxA	707.70	1188	0.60	
Total	2136.16	1392		**p<.01

原因として強い順）に並べているが、表12の項目番号と内容は表10に対応している。

表12 LSD 法による多重比較の結果（学習者の自己英語力評価に関する7項目）

2	ns
3	* *
4 ^a	* * *
4 ^b	* * * ns
6	* * * ns ns
7	* * * * * ns
	1 2 3 4 ^a 4 ^b 6

表11, 12より、ここで取り上げた7項目について5%レベルで有意差がみられた箇所を図示すると図2のようになる。有意差がある箇所を>を用いて表すと、「英語の質問に英語で答えるとき、いつもあがってしまい、うまく答えられない」・「私は、もう少し英語を勉強すればもっと英語ができるはずだと思う」>「私は英語を読む力はある」>「私は英語を聞く力はある」・「私は英語を書く力はある」・「私は英語は得意である」・「私は英語を話す力はある」という関係になっていた。

英語を話す時		聞く力はある
あがってしまう		書く力はある
勉強すればもう少し	>	読む力はある
英語ができるはず	>	英語は得意
		話す力はある

図2 学生の英語自己評価の関係

4.4. 先行研究結果と一致の程度について

4.4.1 英語学習に対して学生が感ずる不安について

英語学生に対して学生が感ずる不安について、どの程度結果が一致するのかを検討するため、今回の199名を被験者とした研究結果と、先回の197名を被験者とした研究結果を比較したが、表13のとおりである。どの程度の関連がみられるかを確かめるため、スピアマンの順位相関係数を算出したが、 $r_s=0.992$ であり5%レベルで有意であった。

4.4.2 英語の授業中、皆の前で話すときに不安を感じる理由について

英語の授業中、皆の前で話すときに不安を感じる理由について、今回の199名を被験者とした研究結果と、先回の197名を被験者とした研究結果がどの程度一致するのかが確認するため、まず両研究の結果を比較したが、結果は表14のとおりである。両者間にどの程度の関連がみられるかを確かめるため、スピアマンの順位相関係数を算出したが $r_s=0.964$ であり5%レベルで有意であった。このことより、不安を感じる理由は被験者が異なっても同様の傾向が

表13 英語学習に対して学生が感ずる不安について (1994 : N=199; 1993 : N=197)

項目順 (1994)	平均値	SD	順位(1993)	平均値	SD
1. 突然英語で発言するよう指名	4.51	0.76	1	4.59	0.72
2. 授業中皆の前で英語で話す	4.10	0.97	2	4.35	0.83
3. 授業中英語で意見発表, 寸劇を演じる	4.06	0.87	3	4.24	0.85
4. 授業中, 皆の前で役割を自発的に演じる	3.91	0.92	5	4.01	0.92
5. 準備してきた英会話を, 授業中に全員の前で発表	3.86	1.08	4	4.17	0.89
6. 授業中, 英作文を書く	3.80	1.01	6	4.00	1.00
7. 英語によるディスカッションに自主的に参加	3.77	0.90	7	3.93	0.96
8. 英語による質問を聞いて, その答えを英語で書く	3.75	0.93	8	3.92	0.90
9. 答えを黒板に書く	3.70	0.97	9	3.87	0.96
10. role play (役割練習) を皆の前でする	3.68	0.92	11	3.81	1.03
11. 教師の言ったことを, 一人だけで繰り返す	3.59	1.03	12	3.65	1.11
12. 質問に対して指名されるのではなく自発的に答える	3.58	0.98	10	3.83	0.93
13. 家で英作文を書いてくる	3.34	1.17	14	3.46	1.11
13. 2人1組で作った英会話を皆の前で発表する	3.34	1.00	13	3.60	1.02
15. 外国人教師と一緒に活動する	3.27	1.09	15	3.33	1.14
16. 2人1組で英語で質問し合う	3.00	1.05	16	3.31	1.04
17. 新聞や写真を参考に英語の勉強をする	2.97	1.04	19	3.11	0.93
17. 英語の教師の研究室で個人的に教師と話す	2.97	1.16	18	3.22	1.25
19. 教師が学生全員を公平に指名する	2.95	1.05	21	2.91	1.01
20. 教科書の練習問題をする	2.93	1.02	20	3.10	0.95
21. 2人1組で短い英会話を考えて作る	2.91	0.98	17	3.30	1.05
22. 英語の発表前に, 口頭練習の機会が十分	2.62	0.92	22	2.85	1.02
23. 3~4人のグループで練習する	2.49	0.97	23	2.57	0.96
24. 授業中グループに別れゲームで勝敗を競う	2.43	1.06	24	2.49	1.10
25. 教師の後について繰り返す	2.35	1.00	25	2.41	0.94
26. ビデオを見たりテープを聞いて学習する	2.18	1.03	26	2.29	1.00
27. 授業中英文を黙読する	2.04	1.00	27	2.05	0.99
28. 授業中英文を音読する	1.78	0.84	28	1.88	0.92

表14 英語の授業中皆の前で英語を話すときに不安を感じる理由 (1994 : N=199 ; 1993 : N=197)

項目順 (1993)	平均値	SD	順位(1994)	平均値	SD
1. 恥をかきたくない	3.71	0.96	1	3.97	0.90
2. 英語を話すのは理屈抜きでいや	3.41	1.18	2	3.51	1.13
3. 先生に英語ができないと思われたくない	2.71	1.06	3	3.02	1.14
4. クラスメートに英語ができないと思われたくない	2.70	1.10	4	3.01	1.13
5. クラスメートによりプライドが傷つく	2.27	0.96	6	2.39	1.03
6. 先生によりプライドが傷つく	2.21	0.96	5	2.40	1.01
7. 英語は得意なので不安は感じない	1.66	0.88	7	1.52	0.79

見られることが明らかになった。

4.4.3. 学習者の自己英語力評価について

学習者の自己英語評価について、今回199名を被験者とした研究結果と、先回の197名を被験者とした研究結果がどの程度一致するのか確認するためまず両研究の結果を比較したが、結果は表14のとおりである。両者間がどの程度の関連がみられるかを確かめるため、スピアマンの順位相関係数を算出したが、 $r_s=0.857$ であり5%レベルで有意であった。このことより、被験者が異なろうとも、英語力の自己評価について同様の評価をしていることが判明した。

表15 学習者の自己英語力評価（1994：N=199；1993：N=197）

項目順（1994）	平均値	SD	順位（1993）	平均値	SD
1. いつもあがってしまう	3.87	1.05	1	4.12	0.99
2. 勉強すればもっと英語ができるはず	3.72	0.92	2	3.64	1.10
3. 私は英語を読む力はある	2.18	0.89	3	2.02	0.97
4. 私は英語を聞く力はある	1.92	0.82	6	1.72	0.83
4. 私は英語を書く力はある	1.92	0.83	5	1.75	0.86
6. 私は英語は得意である	1.81	0.92	4	1.83	0.97
7. 私は英語を話す力はある	1.70	0.75	7	1.50	0.69

5. 研究の考察

5.1. 学生は英語学習のどのような活動についてどの程度不安を感じているのかについて：

本研究の結果をみると、「突然英語で発言するよう指名される」ことに最も強い不安を覚えていることが明らかになった。次に、「皆の前で英語で話す」、「英語で意見を発表したり寸劇を演じる」、「授業中英語で意見発表、寸劇を演じる」、「授業中、皆の前で役割を自発的に演じる」、「準備してきた英会話を、授業中全員の前で発表する」などの英語をクラスメートの前で話すことと、「英語による質問を聞いて、その答えを英語で書く」、「答えを黒板に書く」という「英語を書く」活動に強い不安を感じていることが判明した。一方、「3～4人のグループで練習する」、「グループに別れてゲームをし勝敗を競う」、「教師の後について繰り返す」、「ビデオを見たりテープを聞いて学習する」、「英文を黙読する」、「英文を音読する（全員で）」といういわゆるグループ活動に対して不安を感じないでいられると回答していた他に、「英語の発表前に、口頭練習の機会が十分に与える」のであれば、不安をあまり感じないで済むこともわかった。以上の結果から、皆の前で英語を話すことに強い抵抗があり、その場合、突然であれば、予め準備をしている場合に比べて、より強く不安を感じている学生像が浮かび上がった。その一方、3～4人以上のグループによる学習活動やビデオなどの視聴覚教材を併用する学習という、個人的に目立たない学習には抵抗感がなく、さらに英語を話す前に、十分に口頭練習の機会が十分に与えられればそれほど不安が強くないことが明らかになった。今回の研究結果は、欧米での先行研究（Horwitz et al., 1986; Young, 1991）が指摘しているように、「グループの前で学習中の言語を話す」活動が授業中の不安を最も高める原因であるという報告と一致してい

た。しかし、日本人学習者の場合、予め準備をしている場合でもなお不安を感じるが、発表の前にさらに十分に口頭練習をする機会を与えられれば不安が低くなることが、欧米での研究結果と異なる点であった。

5.2. 英語の授業中他の学生の前で英語で話すときに感じる不安の原因について:

本研究の結果をみると、全体に平均値は高いというわけではないが、学生は英語の授業中他の学生の前で英語で話すときに、「まちがったり、変なことをいって恥をかきたくない」ことを不安を感じる最大の原因としてあげていた。次に、英語を話すこと自体に理屈抜きでいやだという抵抗感があることがわかった。さらに、自分が英語ができないと教師やクラスメートに思われたくないという気持ちが、自分のプライドを傷つくからという気持ちより強いことが明らかになった。以上より、学生は、恥をかきたくないことや教師、クラスメートに自分がどのくらい英語が話せるのかについてどのように判断されるのかという、他者による判断に関連して不安を覚える傾向がうかがえた。

5.3. 学生は自分の英語力をどのように評価しているのかについて:

本研究の結果から、学生は「英語を話すとき、いつもあがってしまい、うまく答えられない」と感じていることが明らかとなった。また、平均値をみると必ずしも高い値を示しているとはいえないが、「勉強すればもう少し英語ができるはずだ」と思っていることも判明した。さらに、いわゆる英語の4技能についての自己評価は、「読む」力が「書く」、「聞く」、「話す」力よりはるかと評価していた。しかし「読む力がある」の平均値がかなり低いことから、全体的に、学生は自分の英語力を4技能とも低いと感じていたといえよう。以上の結果は Young (1990) の指摘にもあるとおり、学生が自分自身の英語力を低い評価し、そのことが授業中不安を感じてしまうことに結びついている結果になっていると推察される。

5.4. 先回の結果との比較について:

語学学習における重要な情意要因として、不安は常に取り上げられてきた (Gardner, 1985; MacIntyre, 1991) が、不安が語学学習に及ぼす影響については一貫性のある結果が得られていない (Young, 1990) ことが指摘され、国内の研究についても同様のことがいえる。そこで、今回は先回とほぼ同数の被験者が得られたので、学生の英語の授業中に不安を覚える学習活動とその理由、さらに英語の自己評価力について、どの程度一貫性がみられるかどうか、検討した。

調査対象であるが、先回、今回ともに大学1年生が被験者であり、人数は先回は197名、今回は199名であった。以上の2回の調査から得られたデータがどれほど一致しているのかを調べるため、それぞれスピアマン順位相関係数を算出した。その結果、授業中の不安については $r_s = 0.992$ 、その理由については $r_s = 0.997$ 、英語力の自己評価に関しては $r_s = 0.857$ という有意な相関係数が得られた。つまり、この2回の研究結果は非常に一致度が高いといえる。対象者が違っていても、回答の傾向は同様であるといってよいことがわかり、以上の3点について高い一貫性がみられた。

引用・参考文献

- Brown, H. Douglas (1994) *Principles of Language Learning and Teaching* (Third Ed.)
Prentice Hall Regents
- Ely, Christopher M. (1986) "An Analysis of Discomfort, Risktaking, Sociability, and Motivation in the L2 Classroom," *Language Learning*, Vol.36. No.1, pp.1-25.
- Gardener, Robert C., R. N. Lalonde R. Moorcroft (1985) "The Role of Attitudes and Motivation in Second Language Learning: correlational and Experimental Considerations," *Language Learning*, Vol. 35, No2, pp. 207-227.
- 北條 礼子 (1992) 「外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究（1）」
上越教育大学研究紀要 第12巻 第1号 53～64頁
- _____ (1993a) 「外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究（2）」
上越教育大学研究紀要 第12巻 第2号 409～421頁
- _____ (1993b) 「外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究（3）」
上越教育大学研究紀要 第13巻 第1号 239～251頁
- _____ (1994) 「外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究（4）」
上越教育大学研究紀要 第13巻 第2号 351～362頁
- _____ (1995) 「外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究（5）」
上越教育大学研究紀要 第14巻 第1号 163～174頁
- Horwitz, Elaine K., Michael B. Horwitz & Joann Cope (1986) "Foreign Language Classroom Anxiety," *Modern Language Journal*, Vol.70, No.ii, pp.125-132.
- Phillips, Elaine M. (1992) "The Effects of Language Anxiety on Student's Oral Test Performance and Attitudes," *Modern Language Journal*, Vol.76, No.i, pp. 14-26.
- Samimy, Keiko K. & J. P. Rardin (1994) "Adult Language Learner's Affective Reactions to Community Language Learning: A Descriptive Study," *Foreign Language Annals*, Vol.27, No.3, pp. 379-390.
- 佐々木 郁夫 (1993) Anxiety, Motivation, and Language Proficiency of Japanese EFL Junior High School Students. 上越教育大学大学院修士論文
- Young, Dolly J. (1990) "An Investigation of Student's Perspectives on Anxiety and Speaking," *Foreign Language Annals*, Vol.23, No.6, pp.539-553.
- _____ (1991) "Creating a Low-Anxiety Classroom Environment: What Does Language Anxiety Research Suggest?" *Modern Language Journal*, Vol.75, No.iv, pp. 426-437.

A Study of Students' Anxiety over Classroom English (6)

Reiko HOJO *

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate: 1) how anxious students feel toward typical learning activities in English classes; 2) why students feel anxious about speaking English in class; 3) how students self-evaluate their English abilities and 4) determine to what extent these results of the questions stated above are consistent with those of a previous study by the author.

Data were gathered from 199 university freshmen, using a questionnaire which was administered in April of 1994. Firstly, the data were analyzed by ANOVA. Then, the data were compared with those obtained in the previous study conducted in the previous year, by computing the Spearman correlation coefficients.

The results showed that: 1) students were most afraid of speaking English in front of their peers; 2) the possibility of making mistakes in speaking English made students feel most anxious; 3) students evaluated their own English abilities rather low and 4) the results in this study were found to be consistent with those of the previous study by the author. Freshmen in this university at least exhibited the same tendencies concerning anxiety over classroom English, the reasons for the anxiety and also in students' self-evaluation of their English abilities.